

Title	遠峰四郎先生のこと
Sub Title	
Author	小田, 英郎(Oda, Hideo)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	2007
Jtitle	法學研究 : 法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.80, No.1 (2007. 1) ,p.121- 123
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	遠峰四郎先生追悼記事
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-20070128-0121

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

遠峰四郎先生のこと

遠峰四郎先生が平成十八年一月に亡くなられたことを知ったのは、この追悼記事の執筆依頼の電話が、先生の後継者である富田広士教授からかかってきた同年十一月下旬のことであった。電話で話しながら思い浮かべていたのは、生前の遠峰先生のいつも変わらぬ温顔であった。先生は常に穏やかで、不愉快そうな表情など見たこともなかった。

遠峰先生は大正四年の生まれであるので、昭和八年生まれの私とは十八も年が離れている。また、同じ地域研究グループに属してはいたが、先生のご専門がイスラーム法であったので、アフリカ現代政治が専門の私とは、学問上の接点はあまりなかった。

本来それではいけなかったのである。アフリカはサハラ以北はもちろん、サハラ以南でも、西アフリカ、中部アフリカ、東アフリカにかなり深くイスラームが浸透している。従って、むろん問題にもよるが、「イスラーム

とは何か」が分からなければ、バランスのとれた研究は期待できない。とりわけ、ポスト冷戦時代に入ってから以後は、アフリカ地域研究におけるイスラーム問題の重要性は高まる一方である。とくに二〇〇一年の九・一一米国同時多発テロ事件以降は、イスラーム問題の確かな認識なしには解明できない問題が、アフリカには数多く出現している。時計の針を何十年分か戻して法学部の現役時代に立ち返り、遠峰先生にイスラームについていろいろと教えを請いたい気分である。

さきほど、学問上の接点はあまりなかったと書いたが、まったくなかったわけではない。遠峰先生と私との最初の学問的会話は、私が法学部助手に残った昭和三十七年に初めて『法学研究』（三五巻九号）にヴァイキオテイス（P. J. Vatikiotis）の *Egyptian Army in Politics* の書評を載せたとき、まさにその書物の表題の通り、エジプトの軍隊の政治介入、政治的役割などについて、交わされたものであった。当時、私はアフリカにおける軍部の政治介入の問題に関心を持ち始めていたので、ヴァイキオテイスのこの本を取り上げたのだが、恐らく遠峰先生は、サハラ以南のアフリカを研究対象にするものと思っていた新人の助手が、エジプトの政治と軍部の問

題に関心を寄せたことが、少し嬉しかったのかもしれない。その後、私が『法学研究』に発表した論文などについて、第一研究室の談話室で出会ったときなどに手短なコメントを下さったりした。

遠峰先生とともに共同研究に参加したこともある。法学部内に昭和四十一年に組織された「地域研究グループ」の共同研究がそれで、奇しくもこれまた「政治と軍部」が統一テーマであった。同じ年、政治学科にまず「政治学共同研究委員会」が設置され、学科内で共同研究を盛んにしようという趣旨に沿って、いち早く組織されたのが、地域研究グループだったのである。「政治と軍部」についてのこの共同研究の成果は、昭和四十三年三月には(慶應義塾大学地域研究グループ編)『変動期における軍部と軍隊』(慶應通信)として出版され、日本におけるパイオニア的研究としての価値を認められたように記憶している。遠峰先生は「イラン、イラクの軍部・軍隊と政治」と題する論文を執筆され、両国における軍隊の創設・発展とその近代化、そして軍部エリートが次第に政治化していく過程を、簡潔に述べておられる。同書の執筆者は、遠峰先生と巻頭論文を書かれた内山正熊教授を除けば、あとは十五から二十幾つも年の離

れた、ほとんどが三十代の若手ばかりであったが、よく溶け込んで下さって、協力を惜しまれなかった。

なお、地域研究グループは同じ昭和四十三年九月に D・E・アプター編『イデオロギーと現代政治』(慶應通信)を翻訳出版しているが、遠峰先生は担当した論文の訳業のほかわれわれ訳者を代表して「訳者まえがき」を執筆しておられる。そうした次第で、この時期、比較的遠峰先生と接する機会があったせいも、日本オリエント学会への入会を勧められる場面もあったが、私は煮え切らない返事をしたままで、結局その話は立ち消えになった。

さて、話は突然五十年ほどさかのぼる。私の大学時代のクラスメートの一人が、結核にかかって休学し、一年遅れて卒業の時を迎えた。病後で体調が万全でなかった彼は、卒業に必要な最小限の単位取得で済ませるつもりでいたところ、勘違いで、このままでは単位不足となり卒業できないという、一大危機に直面した。そこで助けを求められた私は(当時兼任講師であった遠峰先生担当手伝って)、急遽、当時兼任講師であった遠峰先生担当の「政治学科特殊講義(アラブ圏事情)」のリポートの「原案」を作成し、彼がそれを参考にリポートを纏め上

げて提出、なんとか卒業に漕ぎつけたのであった。これ
でますます深まった彼との友情は、いまでも変ることな
く続いている。遠峰先生が施して下さった功德のひとつ
であるかもしれない。いま、遠峰先生のご冥福を祈りな
がら、そんなことを思い出している。

(二〇〇六年十二月十七日・記)

小 田 英 郎